

上野先生のこと

山田英教

ぼくが初めて上野先生の「声」をお聞きしたのは、ある映画の中であった。62年に制作された、岡本喜八監督の「日本の最も長い日」のトップ・シーン、連合軍のポッドラム宣言放送を青年将校たちが傍受するシーンに流れるポッドラム宣言の英語のナレーションをなされたのは先生だったのである。後年、本学で一緒に勤務するようになるまで、あの英語のナレーションはてっきりアメリカの専門アナウンサーの英語だとばかり思っていたぼくは、ある時あの英語が先生のものだと分かって一驚を喫することになる。それほど先生は正確できれいな英語を話される方だった。

簡単に留学もでき、英語を話し聴く能力も多様な手段で開発しうる今日とはまったく状況の違う、戦後まもない50年前後の時代環境のうちで、しかもずいぶんご苦労なさりながら、どのようにしてあのような英語の力を蓄積なさったのかを後学のために伺いたいと思ひながら、とうとう伺えぬまま今日に至ってしまったのはまことに残念なことではある。

先生は狂騒を厭い和を愛する、まさに字義通りの紳士で、常に温顔に微笑を湛え思慮分別を弁えた落ち着いた雰囲気漂わせておられた。会議で議論が白熱した時など、先生の安定した存在そのものにぼくは救われる思いがしたことが多々あった。個人の内的葛藤は別にして、大学・大学院・留学・教師と進み、良く言えば純粋培養、悪く言えば世間知らずで観念の世界でしか生きられぬ人たちの多い文学部のスタッフの中であって、先生は若くして現実の社会で苦闘され人間の何たるかを見てこられた方であり、先生の安定感はその経験と学問研究を止揚されたが故に生まれたユニークで貴重なものであった、と今にしてぼくは思い知らされるのである。この安定した存在感を人々におのずと感得させる点で、先生は真の意味で「大人」の大学人でいらした。時折、ぼつりと洩らされる「もっと大人になれないものですかね」という先生の言葉に説得力があるのは、先生の存在そのものが背景にあったからに他ならない。

また、先生に接している間に次第にぼくには分かってきた、この温容の悠揚迫らざる人が時と場合によっては毅然として「ノー」と言える強い精神の持ち主であり、一つの責任ある立場につかれた際の決断を下し行動する剛毅果断の人であることも。先生とは不思議な因縁で、80年にぼくの後で教務部長を引き継いでいただき、逆に97年には先生の後を継いでぼくは副学長の仕事をした。このような立場に立ち別の視点から先生を見ることになり改めてぼくに分かったことは、先生の時宣をえた的確な決断力、自己の責任で事態を処理する行動力、組織の機能を効果的に作動させる管理能力であり、いずれも非才の身は先生の器の大きさに感じ入ったものであった。今のぼくの意識には、先生は「剛毅果断の強い精神をもつ温容な大人」のイメージがしっかりとぎざまれている。

その先生がご定年で去っていかれる。藤沢周平の名作『三屋三左衛門残日録』の主人公のように、先生の「日残りて昏るるに未だ遠し」の日々が良き日々であることを祈念してやまない。